

目で見る方法序説

——視覚の方法化、もしくは考現学と民俗学

川田 牧人*

あなたは私を見たから信じたが、私を見ずに信じる人は
幸いである
ヨハネによる福音書 20-29

■ 要 旨

フィールド科学にとっての「目で見る方法」である参与観察 (participant observation) は、「参与 (観察)」に焦点をあてた議論が 80 年代の民族誌論を中心にさかんなされたものの、もう一方の実践論としての「(参与) 観察」論は、ほとんどなされてこなかった。社会学、民俗学、文化人類学などの近接関係の中で、考現学は視覚の方法化を徹底させた独自の方法の学である。その方法には、調査者自身がさまざまな機器として計測・集数・記録する道具的人間の発見と、見ることを通じて実際には見ていないものまでも可視化するための擬似的視覚の創出というふたつの主題が見出される。これに対し、柳田國男が構想した民俗学方法論においては、民俗資料を有形文化・言語芸術・心意現象の三つに分ける三部分類がとられたが、その第一部には「目の採集」がおかれ、視覚の方法化が試みられた。それは柳田の構想にある採集・分類・索引・比較・総合という五段階の学的営為の組み立てにも直結している。しかし民俗学における視覚の方法は、現在をもって過去を見るという歴史的遡及の視力へと醸成していくことにより、考現学とは異なった展開を示す。見ていないものを可視化させる方法として、さらに新たな視覚を発生させる考現学とは異なり、民俗学は見えないもの (歴史や心意) を直視するという立場を形成していったのである。

キーワード：視覚、参与観察、考現学、民俗学

*中京大学

1 はじめに

フィールド科学にとってのフィールドワーク、あるいはよりひろく社会調査全般において、「目で見える方法」とはいかなるものか。これが本稿の基本的な問いである。とくに人類学的フィールドワークに携わる者にとっては、「参与観察 (participant observation)」ということばは、必須・必携の装備として強調されてきた。そしてそこに「観察」の一語があるかぎり、目で見える方法はフィールドワークの中核をなすはずである。しかしこの方法の内実、すなわち何を、どのようにして観察するのかといったノウハウとして語られることはきわめて少ない。近年のフィールドワークやエスノグラフィーの復権の動きをさして「フィールドワーク・ルネッサンス」ということばがさしたる誇張ではないという佐藤郁哉は、この技法論不在状況をつぎのように述べている。「ただし、日本では現在のところ必ずしも同じような状況〔欧米におけるフィールドワークや民族誌についての方法論的な研究が活況を呈している状況をさす：筆者〕ではない。社会学で『調査』といえは未だにサーベイを指すことが多く、人類学の場合も、一部で民族誌に関する反省的研究が発表されてはいるものの、フィールドノートの作成法にはじまりその他さまざまな調査技法についての吟味、あるいは、それらの技法によって得られた知見と理論との関連をどのように考えていくかについての方法論的な検討という点では、ほとんど見るべきものがない」〔佐藤, 1997: 43〕。

実際に、一般に入手できるフィールドワークの教科書、調査方法論の類には、インタビューの方法についてはとても丹念に解説されている。質問の仕方、現場でのメモの取り方、その清書の仕方、カードの分類と整理、コーディングの仕方等々、たいへん詳細である。これは、フィールドワークについてよく言われる「あるくみるきく」というフレーズのうち「きく」の部分が中心に情報化されている状況であるといえよう。

それに対し、視覚情報というのはそれをすべて言語化できないという意味で、テキスト化が困難である¹⁾。それゆえにこそ、観察調査については、聞き書き調査ほどに精緻化されたノウハウが伝授されることはないのである。

しかし「目は足についている」と同時に、「見ることは考えること」すなわち「目に脳みそがついている」ことでもあるとすると、フィールドワークにおける思考とは、視覚という感覚が方法化されるという段階を抜きにしては考えられないことになる。

したがって、目で見える方法とはいかなるものかという問いは、同時に、視覚が思考に直結するというのはいかなることか、という問いに転換される。

見ること＝考えること、というのは、観察と実験に根ざした近代科学に一貫してみられた基本的態度であった。とりわけ自然科学を成り立たせている合理主義、実証主義の手続きには、見ることは不可欠であるといえる。逆にいえば、見ることすなわち視覚を方法化させた地点に、近代科学が成り立ったといっても過言ではない。しかしこれは、自然科学についてのみ言えることではない。近代人類学の成立と称される事態には、フィールドワークが本格的にその方法論として確立したことが深く関わっている。その中心人物は言うまでもなくマリノフスキーであり、彼のフィールドワーク実践と方法としての参与観察はセットのようにして考えられている。したがって参与観察について考えるには、観察という「科学的」性格がその方法論を確立したとされるマリノフスキー本人においてどのように構想されていたかを考察するという方向性がありうる。

ただし本稿では、別の角度から視覚の方法化について考えてみたい。すなわちこの方法がもっとも先鋭化した隣接領域として考現学の手法を検討し、それと民俗学との対照をこころみる。文化人類学にきわめて近い現地調査の手法を持ちながら、民俗学は参与観察という方法が人類学ほどには強調されることはなく、むしろ聞き書きが主流をなしている。そこにおいて「見ること」はいかなる意味があるのかを、もうひとつの兄弟分の領域である考現学と対比することによって考えてみたい。その手前の作業として、現今の日本の言語環境において、参与観察ということばが流通している様態を明らかにするが、上にあげたマリノフスキーの構想や、観察が「科学的」方法だとされる際の「科学」概念についての検討など、「目で見える方法」について考え

るべきことは広範にわたる。本稿はそのための序説である。

2 参与観察とはなにか

まず、『文化人類学事典』において、「参与観察」という語を拾い出してみよう。ここで最初に指摘しておきたいことは、人類学的フィールドワークの金科玉条ともいべきこの語が、項目語としてはあがっていないことである。「参与観察」もしくは「参与観察法」ということばは、他の項目、人類学の理論や学史や方法論全般を説明する文脈で触れられるにすぎない。これが、概念としての軽視を意味するのか、あるいは理論や方法を議論する文脈に埋め込まれるほどまでに当然視されているからなのか、ここでは即断することはできない。

そこでさっそく関連項目をみてみよう。まず「機能主義」の項目中、その特徴を説明する文脈で、「推論に基づく人類史の再構成を放棄し、かわりに特定社会に現地調査に赴き、参与観察を通して克明な記述・分析を行う」[『文化人類学事典』, 1987: 196] とある。また「社会人類学」の項目中、機能主義革命に触れた箇所、「方法としては参与観察とよばれる長期間の、現地語によるフィールドワークを特徴」[『文化人類学事典』: 340] とすると述べられている。これらの文脈においては、参与観察はフィールドワークとほぼ同義で用いられており、置き換え可能であるかのように記述されている。このような文脈で考えられる参与観察は、観察そのものよりも参与の方に力点がおかれているようだということがうかがえる。

参与観察がフィールドワークとほぼ同義で用いられるという点から、次に「フィールドワーク」の項目をみよう。その中に、参与観察そのものについての説明がつぎのようになされている。「この [マリノフスキーのトロブリアード島調査をさす：筆者] 調査で、マリノフスキーが主眼としたのは、参与観察 (participant observation) という調査法であった。参与観察とは、調査対象となっている社会の中で暮らし、そこで営まれている社会生活に関するデータを、人々と交際を行なう過程で収集することである」。しかしこの

項ではつづけて、次のように記されている。「しかしながら、この参与観察を十分に行うことができるようになるまでには、しばしばかなりの時間を必要とする。なぜなら人類学者は、いわば突然にあらわれた異人であり、人々は人類学者に対して、恐れ、軽蔑、敵意などといったさまざまな感情をいだく場合が多いからである。だが、人々の生活にとけこもうとする人類学者の努力が、人々によって認められるならば、人々との間に信頼感のある、親しみ深い関係がうまれてくる場合が多い。このような関係は、ラポールまたはラポア (rapport) と呼ばれる」[『文化人類学事典』: 641]。

ここには誤ったことはまったく書かれておらず、フィールドワークをおこなう上でインフォーマントと十分な信頼関係が構築されていることが不可欠であるという点に異論をさしはさむ者は皆無であろう。しかしここでは、技法論であるはずの参与観察が、いつのまにか人間関係上の心構え論に転換してしまうような説明がなされている。フィールドにおける人間関係の構築はきわめて複雑で細やかな神経を要する。そしてこの人間関係構築という困難な課題が果たされたその先に、参与観察という技法があるというわけである。このように主眼がすりかわってしまう可能性のある議論に、方法としての参与観察を見えにくくしてしまうような論理があるともいえよう。

あるいは、フィールドにおける人間関係とそこで発動される方法論を明確に峻別することは可能か、という議論もありえよう。参与観察とは、参加する主観と観察する客観が縋い交ぜになっている特異な方法論であるはずだ。ところが、まず人間関係の構築、その先に参与観察実施、といった構図においてはこの縋い交ぜが分断されてしまう。

もっとも参与観察という語が複合語である以上、調査行為がその実践としては縋い交ぜになっていたとしても、概念上は多少の分断がおこってしまうことは避けられないかもしれない。この点から考えると、参与観察論としては「参与（観察）」論と「(参与) 観察」論のふた通りが可能であるといえる。しかし現況においては、「(参与) 観察」論より「参与（観察）」論の方が圧倒的に大多数を占めており、それと比較すると技法論としての「(参与) 観察」論においては、生産的な議論があまりになされないままになって

きたといえよう²⁾。

「(参与) 観察」論に焦点をあてる前に、もう一点、参与観察の教科書的意味についてふれておこう。佐藤郁哉著『フィールドワーク』[1992]は、大学の調査実習などで用いられる有益な参考書であるためもあって、もっとも読まれる調査概論書の一冊である。ここに、参与観察は一節をさかれて説明されているが、それによれば広義の参与観察には、①社会生活への参加、②対象社会の生活の直接観察、③社会生活に関する聞き取り、④文書資料や文物の収集と分析、⑤出来事や事物に関する感想や意味づけについてのインタビューの五つの活動がふくまれる [佐藤, 1992; 129-135]³⁾。広義の参与観察とはフィールドワークとはほぼ同義であり、上記の五つがその主な活動内容ということになる。これに対し、①を中心とした②③の活動が、狭義の参与観察といわれる内容となる。

参与観察ということばからは、①と②の活動の複合態が容易に想像されるが、この佐藤の整理によると③の聞き取り調査、すなわち耳によるデータ収集も含んだ形で狭義の、つまり厳密な意味での参与観察としている。ここには、参与観察を純然たる視覚の方法として限定的に考えることができず、部分的には聴覚の方法との重なりについて考察する方向性が示唆される。それは、「(参与) 観察」論がたんなる「観察」論とは別の地点に構想されなければならないことの示唆であるといえるかもしれない。

このことと関連して佐藤があげるのが、フィールドワーカーの立場・役割のシフトである。それによるとフィールドワーカーは、完全な参加、観察者としての参加、参加者としての観察、完全な観察という四つの様態を臨機にシフトする。このなかでも狭義の参与観察として想定されるのは、第二の観察者としての参加、つまり調査訪問地の住民に「あの人は観察者としてここにいるのだ」ということを認知してもらいつつ参加するということであるという。そしてまたこのシフトにおいて、「(参与) 観察」論に対する「観察」論とは、四つ目の完全なる観察者のスタンスであり、観察者と被観察者がいっさいの対話的交渉を持たない仮想上のスタンスである。訪問地住民が調査者を観察者としての参加者であるとする認識が生じるためには、聴覚の方法

が部分的に重なり合わされる。相手にこちらを認識してもらおうという点では、むしろ発話の方法といえるかもしれないが、たとえばこちらの自己紹介に対する相手の受け答えによって再びこちらの位置取りが決まるなど、音声情報を媒介とした相互交渉が前提となっている。

参与観察における視覚の方法は、なぜ論じられることが少ないのか、あるいは技法の問題として視覚を方法化することの困難は何か、という問いについて、以上のことから輪郭をなしてくるのは、そこで議論の俎上に載せられようとしているのが「(参与) 観察」論であり、それは「参与 (観察)」論と「観察」論のあいだに位置しているということであった。参与観察の一般的な意義や従来の議論においては「参与 (観察)」論に焦点があてられることが多く、方法としての視覚を捉えにくくしてしまう側面がある。ところが「(参与) 観察」論には視覚だけでなく聴覚も関連する側面があり、純然たる「観察」論とも一線を画するべきものである。ここに、視覚の方法のアポリアが存在する。

3 今和次郎／もしくは考現学の視力

「参与 (観察)」論に対する「(参与) 観察」論は可能かという問題は、視覚という感覚を可能な限り調査技法として方法化することを意味する。そして前節での検討から、純然たる「観察」論と照らし合わせながら、あるいはそれをある程度視野に入れた上で、そしてあるときには（「参与 (観察)」論との距離を明確にするうえでも）視覚という感覚作用の実態に極限まで接近した形で、調査技法としての視覚の方法を検討する必要が生じる。この方法のもっとも先鋭化した試みとして、ここでは考現学における「視覚の構築」について考える。

「視覚の構築」とは、佐藤健二のつぎのような指摘における用語である。「考現学の本質のひとつが、このような図形化による独自の『視覚の構築』にあり、その構築こそ裸眼の漠然とした印象からは見えにくい『現代』を『考え』る根拠となっている」[佐藤, 1994: 103]。この指摘にはきわめて

重要な含意がある。それは、たしかに眼前に存在する事物や出来事を目という視覚器官を通して受容してはいるのだが、それだけでは「見る」ことが可能になっているとは限らない、「見えにくい」ものがあるということである。たとえばスケッチなどで「見たままを描け」と言われたときの困難に端的なように、参与観察に動員される視覚もそのまま表象されるわけではない。これは佐藤のことばでは「ありのままを写してはいない」[佐藤, 1994: 102]ということになるのだが、この見たままありのままの不可能性のゆえに、逆説的に、視覚を特定の技法とする対象の捉え方が成り立つとも言えるのである。このようにして構築された視覚を駆使するのが、考現学の調査法であった。

考現学における「視覚の構築」のための技法は、佐藤がきわめて明解に九つに分類しており、それを表1のように整理した。このうちもっとも考現学の特徴をあらわしたものが「分類統計法」(見分けて数える方法)であり、その成果である「東京銀座街風俗記録」はきわめて考現学らしい記述といえる。この考現学らしさのひとつの根拠は、方法としてのわかりやすさにある。その調査規定は次の通りである。「一、京橋から新橋までの間を調査区間とする。／一、歩道のうえだけを調査の舞台とする。／一、主として西側を調査する。／一、調査区間を二〇分の速度で歩くこととし、その途上において前方より歩いてくる人のみを調査の対象とし、立止まる人、追越す人その他一切を調査に加えない。／一、採集カードには、調査事項の分類絵、日時、調査者の歩いた方角(北側あるいは南側)および調査担当者の名を記入する」[今, 1971: 57]。

ルールはこれだけであり、見ることの方法化が具体的に示されている。各規定を見ても三番目の「主として西側」という部分が曖昧であることをのぞけば、指示が限定的になされているため、調査員の混乱は最小限であったことが想像できる。しかしこの方法さえ共有すれば誰にでもできるものかという、即座に肯んずることはできない。なぜなら調査内容が微に入り細にわたっており、前方から来る人を観察すると同時に記録することを想定すると、かくも多岐にわたる調査がよくぞ実施できたものだと感嘆せざるを得な

表1 考現学における視覚の方法化

	方法	意味	調査成果
1	分類統計法	見分けて数える	東京銀座街風俗記録 [本所深川貧民窟付近風俗採集] [小樽市大通(花園町)服装調査]
2	鳥の目/虫の目法	測って想像する	井の頭公園自殺場所分布図
3	重ねスケッチ法	見通して比べる	女の頭 郊外風俗雑景
4	記譜法	記号に直して考える	街頭のメロディ 盆踊り [デパート風俗社会学]
5	徹底書き上げ法	ひとつ残らず書き上げる	無産者児童 [本所深川貧民窟付近風俗採集]
6	破損解説法	症状を読みとる	洋服の破れる個所 カケ茶碗多数
7	生態分布図法	位置をとらえて地図にする	井の頭公園自殺場所分布図 [井の頭公園春のピクニック] [早稲田付近各種飲食店分布状況] [早稲田・慶応・帝大ぐるり調べ]
8	生態尾行法	動きをとらえて地図にする	横浜ダンスホール [住居内の交通図]
9	所有全品調査法	場所ごと人を調べあげる	新家庭の品物調査 下宿住み学生持物調べ

出典：佐藤，1994：104-119

「調査成果」のうち、佐藤があげている以外のものについては [] 内で補足した。その出典は、[今，1971]。

い。たとえば対象が男性の場合、服の色、外套、カラー、ネクタイ、時計の鎖、手袋、靴、和服の状態、着物と羽織の柄、履物、足袋、髭、眼鏡、帽子、携行品、タバコの16項目を観察ポイントとしてもうけ、それぞれについて分類していく。同様に女性の場合さらに多く、和服と洋服の割合、着物、平常着と外出着の割合、着物と羽織の柄、着物と羽織の地質、着物の模様、衿の合わせ方、帯、帯止め、半衿、履物、スカーフの色、足袋、洋装、結髪、櫛、化粧、眼鏡、ハンケチの色、手袋、バッグ・持物・傘、歩き方の22項目におよんでいる。

この分類の微細さに通じさらに徹底させたのが、「徹底書き上げ法」（ひとつ残らず書き上げる）と「所有全品調査法」（場所ごと人を調べあげる）である。これらはいずれも悉皆調査とよばれる手法であるが、「客観」と「実証」という方法論としての必要条件を究極的な状態にまでおしすすめたものである。ある対象をすべてもれなく拾い出した上で分類するというプロセスを考えれば、これらの悉皆調査法が上記の分類統計法と密接な関係にあることも理解できる。

このような方法は、現在の映像機器を利用して、さらに大規模に展開させることが可能である。たとえば『地球家族』という写真集がある。これは、世界の30カ国から中流家庭を一家庭選び出し、その家にある家財道具をすべて庭や空き地に出してもらい、それとっしょに家族全員の写真をとるというコンセプトで編集され、国別、家族ごとの写真が掲載されている[マテリアルワールド・プロジェクト（代表ピーター・メンツェル）、1994]⁴⁾。このプロジェクトでは対象家族が決定すると、カメラマンがその家へ行って約一週間家族とともに暮らし「ミディアム・フォーマットの集合写真と35ミリの日常生活のスナップのほかに、一家族当たり平均4時間のHi8ビデオ」[マテリアルワールド・プロジェクト、1994：16]を撮影したという。すなわちこのプロジェクトには、映像人類学における視覚の問題と同時に、「参与（観察）」論上の問題も含まれている点で興味深い⁵⁾、ハイテク機器を用いた考現学的プロジェクトであるということもできるのである。

考現学に立ち戻るならば、このようなハイテク映像機器を用いておこなったことを、肉眼と手書きのスケッチでおこなったことに意味があるのではないかと考えられる。「東京銀座街風俗記録」における微細な分類項目の網の目でもって東京銀座という都市を観察することは、調査者が多数のボックスファイルを自らの頭脳の中に埋め込んでいるといえるだろう。また前方からすれ違う人の持ち物や新婚家庭の持ち物をすべてリストアップする調査においては、調査者自身が取数器（カウンター）となっているかのような状況が現出する。このように考現学の試みには、計測し集数し記録する道具としての調査者（人間）が姿をたちあらわすことになる。視覚の方法化が、道具的

人間の開発を促進するのである。

もう一点、考現学調査成果をみて気づくのは、地図などの平面鳥瞰図に建物や人をドットした図が多いことである。表1における「生態分布図法」（位置をとらえて地図にする）や「生態尾行法」（動きをとらえて地図にする）など、また鳥瞰図という点では「鳥の目／虫の目法」の鳥の目にあたる方法である。この地図をベースにした図化は、現在でも町なかや雑誌の中で頻繁に見かける馴染みのあるものであり、考現学に特有の視覚の方法化であると意識されることは少ない。この方法はじっさいには、たとえば早稲田界限の調査などでは既存の地図を利用したことが推測されるが、「郊外風俗雑景」における商店街の店並み図や「小樽市大通（花園町）服装調査」における町の構成図などは、べつに航空図を使用しなくても町並みを歩きながら商店名を一軒一軒書き留めていき、後にそれをあたかも上空から見たかのように図示することが可能である。つまりここにおいて、上空からの全体はあくまでも擬似的な視線であり、実際に見るものは上空からの全体ではなく一軒一軒だということになる。このことを佐藤は次のよう述べている。「虫の目の組み合わせや積み重ねが、図形化を通じて鳥の目の想像力をも生み出す点に、ぼくは固有の可能性を見る。すなわち、ふつうは意識されず、それゆえに計測されたこともない『細部』や『大状況』を、現実の計測を媒介にして図示してゆく。たとえ空を飛ばずとも、また身を縮めなくても、われわれは鳥の目のパースペクティブや虫の目の経験を、記録の操作のなかで構成してゆくことができる。それは異化のプロセスである。そうした視覚経験の極大化・極小化を通じて、また日常的印象そのものをもういちど検討する組上にのせるからである」[佐藤, 1994: 107]。

実際には見ていないものを可視化するために視線を創出するということと同時に、たとえ機器に頼ったとしても実際には得ることのできない視覚情報を獲得するのが、「鳥の目／虫の目法」（測って想像する）である。たとえば顕微鏡はものを拡大することしかできず、望遠鏡は遠くのものを見ることしかできない。肉眼では近望と遠望を細かくスイッチすることが可能だが、日常生活においてこれを意識的におこなうことは少ない。この肉眼の機能を局

部的に意識化させるのが、考現学における視覚の方法化であるといえよう。そして、鳥瞰図は、人間の視線を空中カメラに置き換えてみるという仮定のもとに描かれていることを考えるならば、これら二つの主題、すなわち新たな視覚の創出と、道具的主体の視覚は、たがいに通じあっているのである。

4 「破門」の波紋

前節で検討したように、考現学は道具的主体の視覚、ならびに擬似的視覚の創出というふたつの主題をともなって、「目で見る方法」をフィールドワークの現場にきわめて先鋭化した形でもちこんだ。観察記録のあり方、あるいは「(参与) 観察」論の稀少な状況において、この考現学の位置は特筆すべきものである。考現学が得意とする都市風俗という対象の近接性からも、目で見る方法が民俗学に取り入れられていたならば、その後の民俗調査研究の展開には現在と大きなちがいが生じていたにちがいない。ところが、このような仮定の想像を許さないのが、有名な「考現学が破門のもと」のエピソードである。

年譜⁶⁾によれば、1917年に柳田國男らが設立した白茅会（古民家を保存する目的で設立された研究会）に今も参加している。翌18年には白茅会は郷土会と合同で相州内郷村の調査を実施し、それ以降、今は郷土会の会合に出席したり農村住居の調査に赴くようになる。このように柳田との親交が深まっていった1923年、関東大震災がおこり、それ以降、今の主要な関心は被災地の復興状況を記録することに移っていく。そして1927年、新宿紀伊國屋書店の開店記念として「しらべもの（考現学）展覧会」を開催したが、考現学の旗揚げになったわけであるが、このとき、今自身の記述によると、「しかし、考現学という旗を立てたばかりに、一〇年間も教えをうけた柳田國男先生の心証をすっかり悪くしてしまった。『けしからん、君は』と、民俗学の畑から破門された」[今、1971：482]という「事件」が起こったことになる。

もっとも、考現学という名称で共同調査を開始したことだけが、この「破

門」の原因でないことは、今が別のところで書いている。最初、今は柳田に交通費を工面してもらって農村調査に随行していたが、やがて農林省（農商務省）農政課長石黒忠篤の下で農村の住宅調査に携わるようになった。このことを今は「民俗学の柳田先生に不義理をすることになってしまった」[今、1987：404]と述べており、この段階ですでに柳田に対して負い目を感じていた。それならまだしも、関東大震災によって関心の方向を農村から都市に転換し、さらに民俗学に対して考現学という新たな名称の活動を立ち上げてしまったために「破門」となったと自ら宣言しているのである。

この「破門」の一件は、今が一方向的に喧伝していただけで、じつは真偽の評価には諸説ある。たとえば梅棹忠夫は、民俗学に対する考現学という旗印は柳田にとって青天の霹靂であり、今の側にも柳田に対する学問的対抗意識があったことを読みとり、柳田による「破門」は論理的帰結であったとみる[梅棹、1971：509-511]。これに対して川添登は、「その事実がない」[川添、2004：220]とはっきり述べており、その上でこの「破門」認識が今に生じた経緯と、柳田が考現学を民俗学の一部であるとみなそうとした背景を考察している⁷⁾。前者について、柳田からの破門宣告というより今からの気後れ・遠慮からの敬遠であり、たとえば「生活病理学」における近代主義的観点が柳田の基本的観点とは相容れないものであることを今自身が認識していたことによる。したがって「破門された」というのは、「(破門されて当然なほどの)不義理なことをした」という今の意識のあらわれであったということになる。

本稿の趣旨からすれば、この「破門」の顛末のセンセーショナルな部分はあまり詮索する必要はない。むしろ関連するのは、川添のあげる第二点、柳田が考現学は民俗学ではないかと考えた点である。そもそも柳田が考現学に言及している場面は極端に少ないが、そのひとつ『分類漁村語彙』の序で、次のように述べている。「それで私たちが専門の立場から、一応明示して置きたいと思うのは、我々の知ろうとして居るのは今日を作り上げてくれた過去の生活である。殊にそういう中でも何人にも気づかれずに、埋もれて再び現われまいとして居る事実である。今和次郎氏等の所謂考現学の全部では無

いのである」[柳田, [1938] 1970: 254]。目の前の事物を対象にするときにも、考現学のように一切適切を扱うのではなく、そこから歴史（生活変遷史）がよみとれるものに限定して観察するのが民俗学の基本的観点であるから、方法論的視点では考現学の方が包括的であるというのである。にもかかわらず考現学を民俗学として考えたかったのは、民俗学、とくに「ことばの人」柳田國男が線的な思考をとるのに対し、考現学は視覚を用いる面的な思考であり、その必要性を柳田は痛感していたからだと川添は指摘する。柳田は民俗学の組み立てを「採集・分類・索引・比較・総合」の五段階で構想していたが、これは考現学を取り入れることで明確化・具体化するはずのものであったともいえる。

民俗学と考現学は従来、過去指向と現在（から未来）指向という対比的捉え方がなされるのが一般的である。しかしそれにもまして、この線的思考と面的思考という対比は、視覚の方法化という本稿の主題においては重要な意義を持っている。現実の三次元的視界は二次元的表象に転換することができ、それはまず、川添のいうように個々の資料を相互に連続性をもって捉えることに有利である。しかしまた、この効用とはまったく逆に、スケッチのカード化などの場合を想像すれば容易にわかるように、資料の個別化、いいかえれば連続した景観の一点を抽出して資料化することも可能である。面的思考による視覚情報の資料化がもたらすこの連続性と個別性が示すのは、ある事象を深く広く記述する方法であって、柳田の五段階構想にあっては比較の段階にもっとも必要とされるものである。民俗学が考現学との近接関係から、視覚の方法化に取り組んでいたら、現在とはかなり異なった学が立ち上がっていたにちがいないと本節の最初に書いたのは、この意味においてであった。

一般にはこの「破門」の一件は、その後の考現学が民俗学と袂を分かち独自の途を歩んでいくことになる継起として、考現学の側に波紋がひろがったようにとりあげられることが多い。しかしその波紋は、民俗学の側にもひろがっていったはずである。考現学的な方向で視覚を方法化していかなかった民俗学は、しかし観察をまったく捨て去ったわけではない。それを次にみて

みたい。

5 民俗学／もしくは柳田國男の視力

今和次郎による「民俗学からの破門」が彼自身によってやや誇張されたフィクションであり、柳田の側には破門の認識がなかったとしても、考現学がある程度（あるいはかなり強く）意識していたことはまちがいない。とりわけそれが、後の『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』など、民俗学にとって方法論確立の揺籃期にあたることは、単なる偶然以上のものとして一考に値する。

柳田國男が考現学に言及した文書は少なく、ましてや彼自身が今を「破門」にしたと記したものはない。ただ考現学との相違点から民俗学の方法論を説明したものはあり、その一つは先にあげた『分類漁村語彙』の序であるが、もうひとつ『女性生活史』があげられる。これは雑誌『婦人公論』に掲載された連載で、読者からの質問に柳田が答える問答形式をとっている。その質問の一部（あるいは大部分）は、柳田本人か編集者が柳田と相談のうえ出した「サクラ」的質問であったというが、その中に次のようなものがある。「民俗学がその最も重要な資料として、眼の前の生活事実に注目するわけは判りました。そうすると今和次郎先生などの説いて居られます『考現学』というものと、何だか大へん近いもの様な気がしますが、それでよろしいのでしょうか。一つこの境目を説明なすって下さいませんか（伊勢稲子）」。また、「方法殊に資料の取扱い方又は集め方に、民俗学と今いう考現学との差別が有りそうに存じますが、如何ですか（同じ人）」〔柳田，[1941] 2003：376-377〕（著者により、現代仮名づかいに変更⁸⁾。これに対する柳田の回答は、1) 目に訴える物質界の異変は資料の三部門のたったひとつであること、2) 時の推移を大きな要素にして、現代を考えること、3) ありふれた顕著なものに目を留めるかわりに、幾分か珍しくなりかけたものを拾い出すような仕事に力を入れること、の三点に要約される〔柳田，[1941] 2003：377-378〕。

ここで注目したいのは、考現学が「目で見える方法」を主要な道具立てとしてもっていることが、一般読者からの質問にすでに含まれているかのようにして創作の質問が発せられていることである。考現学が観察を中心とする方法の学としての性格を色濃く持っていることは、一般常識とは言わないまでも、かなり広範に認知されていたという設定である。それに対し柳田は、民俗学は歴史的遡及の視力がそなわっている点が異なることを強調しているわけだが、このような質問を柳田が創作・構成するということは、民俗学でも「目で見える方法」は用いるのだと強調しようとしていることを明らかにしているのである。

『女性生活史』が連載されたのは昭和16(1941)年であるが、柳田はこの数年前に、民俗学方法論の書『民間伝承論』(昭和9〔1934〕年)や『郷土生活の研究法』(昭和10〔1935〕年)をあらわし、有名な「民俗資料の三分類」を提唱している。三部とは有形文化・言語芸術・心意現象であるが、三分類には名称などに若干の異同があり、それを表2に示した。前年に刊行された『民間伝承論』では、この三部についてさらに多様な言い換えがなされており、第一部は「生活外形、目の採集、旅人の採集」、第二部は「生活解説、耳と目の採集、寄寓者の採集」、第三部は「生活意識、心の採集、同郷人の採集」とされている⁹⁾。これは序における梗概的記述であるが、その他にも第一部は「生活技術誌、体碑、生活諸様式、ethnography」、第二部は「口承文芸、口碑」、第三部は「俗信、生活観念」といった表現もみられる。一般には目・耳・心の三部という印象があり、民俗学の「骨子」は第三部すなわち生活意識や観念を明らかにすることだとして重要視されているが、目による採集も第一部と第二部にまたがっておかれており、ここからも民俗学方法論において、「目で見える方法」が決して等閑視されていないこと(あるいは目による採集を重視しようとしたその企図)が読みとれる。さらに柳田が「我々は我々自身の眼で見た事実を重んじ、それを第一の資料とする」[柳田, [1934] 1998 b: 60] とのべる文章のタイトルは、「我々の方法」といういわゆるマニフェストである。

表2をみると、第一部と第二・第三部のちがいを項目に見出すことがで

表2 柳田國男の「民俗資料の三部分類」対照表

	『民間伝承論』T9		『郷土生活の研究法』T10	
	分類	項目	分類	項目
第一部	生活諸相（第七章）	概説 二通りの生活 新たなる交通 暦と経験 芸術の根源 遊戯と玩具	有形文化	住居 衣服 食物 資料取得方法 交通 労働 村 連合 家・親族 婚姻 誕生 厄 葬式 年中行事 神祭 占法・呪法 舞踏 競技 童戯と玩具
第二部	言語芸術（第八章）	新語作成 諺と譬え 唱えごと・謎々・童 言葉 民謡 語りもの 昔話	言語芸術	新語作成 新文句 諺 謎 唱えごと 童言葉 歌謡 語り物と昔話と伝説
	伝説と説話（第九章）	伝説概説 伝説の合理化 伝説の型の問題 神話のもの形 伝説・説話の運搬者 世間話		
第三部	心意諸現象	概説 知識と技術 趣味・愛憎と死後の 問題 前代知識の観測 呪術・禁忌 心意研究の重要性	心意現象	知識 生活技術 生活目的

きる。第二部、第三部は項目が削られ、また第二部は『民間伝承論』では「言語芸術」と「伝説と説話」の二章がおかれていたのが、『郷土生活の研究法』では「言語芸術」に統合されている。それに対し、第一部は項目が細分化されて増えている。このちがいは、前者が概説書的な内容を指向しており、三部分類の原理的説明に重点がおかれているのに対し、後者はよりプラクティカルな方法論に傾倒し、各項目の事例を交えた解説にあてられているという性格の違いでもあろう。しかし同時に、ここには視覚特有の広がりをもった事実の捉え方が反映されているとみることもできよう。「住居」にせよ「衣服」にせよ「交通」にせよ、各項目は考現学におけるスケッチ・カードに対応しうる個別性と、比較の準備に値する連続性を予感させる。つまり民俗学においても、「目で見える方法」の萌芽は十分に読みとれるのである。

もう一点、柳田が考現学を意識したとされる『明治大正史世相篇』について少しだけふれる。この作品が農村社会ではなく都市を対象としたものであるがゆえ、ではない。この作品の章構成をみると、「眼に映ずる世相」から「食物の個人自由」、「家と住心地」、「風光推移」あたりまでの感覚論が、のちの三部分類の第一部に相当するように読める。つづいて「故郷異郷」から「貧と病」あたりまでの八つの章は必ずしも第二部に対応しないが、身の丈を超えるマクロな社会問題を対象としており、耳による採集を要する主題である。そして最後の三つの「伴を慕う心」、「群れを抜く力」、「生活改善の目標」は心や生活知識の問題であり、第三部に対応する。つまり『民間伝承論』に先立つこと三年、『明治大正史世相篇』には「民俗資料の三部分類」の実演編としての意味があったと考えられる¹⁰⁾。であるとすれば、柳田はこの方法をもって採集・分類・索引・比較・総合の五段階を成就しようとしていたわけであるから、考現学と同様の視線をもちながら総合の段階にまで到達しようとしていたともいえるわけである。「もし採集と整理と分類と比較の方法さえ正しければ」[柳田, [1931] 1998 a: 16] と控え目に述べる柳田は、その次の段階を構想していたにちがいない。

細分化と同時に総合の方法が、どれほど考現学を対抗勢力として意識していたがゆえにとられたのか、検証するすべは現在の筆者にはない。しかした

とえ対抗意識がじつは（今の側にはなく）柳田にあったとしても、両者が直接バッティングすることはなかった。上のマニフェストの後、自分の目で見えた事実を重んじるどころから柳田が展開するのは、時代差を地方差に置き換えるいわゆる重出立証法であり、見える事物から見えない過去への視覚を発動させるからである。

6 むすび

——柳田國男に見えたもの、あるいはその視力の先へ——

1888年頃、当時14歳だった柳田少年は、ある春の日の昼前、下総の北相馬郡布川の兄の家で、土いじりをしていた。たまたま土中よりきらきら光る寛永通宝を掘り出して不思議な気分を襲われた後、しゃがんだままふと空を見上げると、澄み切った青い空に数十の星の星を見た。これは「幻覚の実験」と題する文章で紹介されている柳田の実体験である〔柳田, [1956] 1999: 292-295〕。このエピソードは『故郷七〇年』にも、「ある神秘的暗示」として引かれており¹¹⁾、柳田の好んだ話の一つだったようである。

このエピソード一つをもって、柳田國男が常人とは異なる超能力を持っていたと考えるのは飛躍が過ぎる。しかし少なくとも、不思議や神秘を性急に定式化せず原型としてとどめ、それを永く記憶の中で反芻しながらああであったかもしれぬこうであったかもしれぬと思い描く、いわゆる可能性を見る視力はあったと言ってよいだろう。そしてそれを詩人だ芸術家だといって冷やかしく笑いにすませられぬ当方の事情は、目で見る方法をつきつめつつ、ある地点でそれを突き抜けてしまって見えないものに到達してしまう柳田の手の内にある。見えないものとは過去がひとつと、本稿ではほとんどふれられなかった心意の問題がある。民俗資料の三部分類、あるいは民俗学の方法論全体が、この心意を骨子として構想されているとすれば、第一部はいかにして第三部につながるのか。

柳田國男のこの可能性の視力は、「一所集中型のフィールドワークを選択しなかった、あるいは、あきらめたあとの構想のありよう」〔関, 1993:

320] のひとつと考えられる。この視力は、柳田の上記のような特異な個人体験に根ざしながら学的共有物となっていたはずであるが、そのプロセスについては今少し吟味が必要である。それとともに、参与観察こそは、一所集中型のフィールドワークを執拗にもあきらめなかった方法である。柳田が「あきらめた」のは、資力と時間が不足することが理由であったが、参与観察においてはいかなる視力を備えていればこれらの不足を補うことができ、「あきらめ」ずにすむことができるのか。このような参与観察の視力についての方向性を見定めること、それが「目で見える方法」として再考するために、この先に問われなければならない。

注

- 1) 見たままを忠実に写しとる技法については、本稿でも少し触れるが、じつはいかなるデフォルメによって成り立っているのかについては、精査を必要とする。本稿は「序説」であるため、立ち入った検討は他日を期したい。
- 2) 本稿の趣旨は、この綯い交ぜ性を分断することではなく、「参与（観察）」論にせめてつり合いのとれるだけの「（参与）観察」論が必要ではないか、その両者のバランスのとれたところに、参与観察が綯い交ぜ性を十分に発揮できる可能性を見出しうるのではないかということである。
- 3) 佐藤はここでの議論をアメリカの社会学を下敷きに展開しているが、この文献情報については、原典を参照されたい。
- 4) もっとも家財道具一式といっても戸外に持ち出すことができないものもあるが、それらについても「写真に写っていないもの」という文章が添えられている。
- 5) さらに本 COE プログラムに引き寄せて考えれば、このような方法で把握され描かれる家族生活が、ある種の幸福論へつながる可能性があるという点でも興味深い。動産・不動産の所有財産ではなく、家族の構成と規模が家族生活の鍵を握ることを、同書は示唆している。
- 6) 年譜については、川添 [2004] 参照。
- 7) 以下、川添の今和次郎評については、川添 [2004: 381–390] 参照。
- 8) これが創作の質問であったことは、質問者の氏名にある。伊勢稲子とは、柳田の初恋の相手伊勢いね子と同名であることが、同書の解題 (p. 746) に記されている。
- 9) これが単なる言い換えでなく、人間の相対化と社会の構造的分析を立体化する分類構想であったことについては、佐藤 [1987] を参照。

- 10) 『世相篇』に三部分類を読み込むのは、必ずしも筆者だけのこじつけではないと考えるようになったのは、佐藤健二の次の文章に行き当たってからである。「それは、論述対象としての風俗・世相の変貌と、その総体としての明治大正史を織りあげてきた主体の変容とを重ねあわせながら浮かび上がらせる、複合的な設定であり文体の戦略であった。この対象と主体との相関の設定は、かつて私が論じた郷土研究の方法論上の上図〔三部分類の構想図をさす：筆者〕のような論理軸と重なりあう骨格を有していると思う」〔佐藤，2001：119〕。
- 11) この文献に関する情報は、小池淳一氏からご教示たまわった。謝意を表したい。

文献

- 『文化人類学事典』，1987，東京：弘文堂。
- 今和次郎，1971，『今和次郎集 1・考現学』東京：ドメス出版。
- ，1987，「考現学が破門のもと」藤森照信編『考現学入門』東京：筑摩書房。
- 川添登，2004，『今和次郎——その考現学』東京：筑摩書房。
- マテリアルワールド・プロジェクト（代表ピーター・メンツェル），1994，『地球家族—世界 30 か国のふつうの暮らし』東京：TOTO 出版。
- 佐藤郁哉，1992，『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』東京：新曜社。
- ，1997，「参与観察」川添登・佐藤健二編著『講座生活学 2・生活学の方法』東京：光生館。
- 佐藤健二，1987，『読書空間の近代』東京：弘文堂。
- ，1994，『風景の生産・風景の解放』東京：講談社。
- ，2001，『歴史社会学の作法』東京：岩波書店。
- 関一敏，1993，「しあわせの民俗誌・序説」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 51 集：313-347。
- 梅棹忠夫，1971，「解説」『今和次郎集 1・考現学』東京：ドメス出版。
- 柳田國男，[1931] 1998 a，「明治大正史世相篇」『柳田國男全集・5』東京：筑摩書房。
- ，[1934] 1998 b，「民間伝承論」『柳田國男全集・8』東京：筑摩書房。
- ，[1938] 1970，「分類漁村習俗序」『定本柳田國男集・30』東京：筑摩書房。
- ，[1941] 2003，「女性生活史」『柳田國男全集・30』東京：筑摩書房。
- ，[1956] 1999，「妖怪談義」『柳田國男全集・20』東京：筑摩書房。

An Introductory Consideration of the Methodology of Seeing in KOGENGAKE and the Study of Folklore

Makito Kawada*

■Abstract

Participant observation is a “way of looking at something visually” that is used in the field sciences. Debates focused on “participant (observation)” were especially popular in the field of ethnography in the 1980s, but there have been few discussions of “(participant) observation” as a practical topic of discussion. Closely linked to sociology, the study of folklore, and cultural anthropology, KOGENGAKE is an independent methodology that thoroughly articulates methods of visual observation. This methodology address two major issues : instrumental human discovery in which the surveyors themselves use various instruments to measure, tally, and record data, and the creation of pseudo-vision, a way of using things that one can see to make visible those things that one cannot see. By contrast, the folkloristic methodology conceptualized by Kunio Yanagita separates folklore materials into three categories : tangible culture, language arts, and intent phenomenon. He tried to develop a methodology for visual observation by placing “visual fieldwork” in the first of these categories. This is directly linked to the development of the five stages of academic agency : field work, classification, establishment of indices, comparison, and conclusion. However, by developing visual methods in the study of folklore into the visual acuity of historical retroactivity, that is, looking at the past from the present, KOGENGAKE expresses different developments. Unlike KOGENGAKE, which is a method of rendering things that cannot be seen into visible form, and creating new visions, the study of folklore was shaped out of the notion of directly seeing things that cannot be seen (history and intent).

Key words : vision, participant observation, KOGENGAKE, study of folklore

*Chukyo University